

幼児期の母子並行面接に関する事例研究

—母親との愛着関係を形成することを中心に—

A Case Study of Concurrent Mother and Infant Therapy —Focus on the Formation of the Child's Attachment to the Mother—

天野 菜穂子* 別府 悦子** ダーリンプル 規子*** 河村 真里子****
Nahoko AMANO Etsuko BEPPU Noriko DALRYMPLE Mariko KAWAMURA

幼稚園や保育所(園)に就園する時期は、母子の愛着関係から自立への第一歩の過程としても注目されている。この時期に集団にうまく適応できない子どもにとって、そうした発達の過程をていねいに支援していくことが重要である。そのための援助の一つとして、親子への面接やプレイセラピーが実施されている。本稿では、登園を渋り、幼稚園での集団生活になじみにくさを示す幼稚園年中児に対するプレイセラピーとその母親に対する面接を同時に行う母子並行面接の過程を報告した。数か月の母子並行面接の過程で、対象児は母親に対して愛着の形成をし、次第に、幼稚園で適応を示すようになった。これは、マラーのいう「分離・個体化」の過程を母親面接および児へのプレイセラピーにおいて見せたと示唆された。すなわち、母親の子どもも理解に変化が起こったことによって、子どもを受け入れていくようになり、また、プレイセラピーにおいては、子どもとセラピストの情緒的交流が生まれ、それが母子間の交流にも促進的な影響を及ぼしたと考えられた。母子の並行面接が両者に内在する発達の力を引き出していくうえで重要な役割を担ったものと推察されたことから、母子並行面接の意義を考察した。

キーワード：愛着関係、母子並行面接、分離・個体化

I. 問題と目的

子どもにとって、保育園や幼稚園への就園は今まで慣れ親しんできた家庭での生活と大きく異なり、子どもはその変化に戸惑うが、多くの子どもたちはやがて落ち着き集団に適応していく。一方、子どもたちの中には登園を渋ったり、集団にうまくなじめないなどの問題を示す場合がある。中には、人と目を合わせない、マイペースで動き回る、保育者の指示を受け入れようとしない、無表情で一方的な関わりをするなどの問題を示す子どもたちもいる。その背景には、子どもの持つ発達障害などの生理的基盤や資質に原因がある場合もあるし、誕生以来の養育者との関係性の中で問題が生じている場合もある。またこれらが複雑に絡み合っている場合もある。

ところで、エリクソン(1973)は、乳幼児期の発達において、母親などの身近な大人との「基本的信頼」が基盤となり、それをもとにして、就園などの新しい環境に適応していく「自律性」や「自発性」が生み出されるとしている。すなわち、保育園や幼稚園への新しい環境への不適応を考えていく場合に、それまでの身近な大人である親との「基本的信頼」が十分に育っているかも考慮していくことが必要であろう。

ボウルビィ(1977)は、その愛着理論の中で、乳幼児と母親の絶え間ない相互作用により、特別な絆が形成され、それを安全基地にして、乳幼児は外界を探索すると述べている。そしてこの経験の蓄積から乳児の内的表象

の世界である内的作業モデル(internal working model)が発達するという。

また、マラー(1981)は、運動、感覚、認知能力の発達が乳幼児がひとりで活動する力(個体化)をつけ、それによって、母親から離れて行動できるようになる分離意識や体験(分離)が、複雑に絡み合っ様々な固有の体験を生みだし、乳幼児の心の形成がなされると考えた。乳幼児は、0歳台から3歳台までの分離・個体化の成長をたどるなかで、自己と母親の表象を統合し心の成長を遂げて行く。その発達のステップは、出生直後の混とんとした「自閉期」から、母親との一体の共生期を経て、生後4~5ヶ月に、「分離・個体化」のステージはじまり、3年に及ぶという。「分離・個体化」のステージは、表1のように、さらに分化期、練習期、再接近期、個体化という段階がある。

このうち、再接近期(生後15か月~25か月)では、幼児の心には、歩行によって確立した分離意識と、もう一度共生期のように母親に抱かれたいという依存性が激しい対立を起し、幼児は母親を独占したいという感情に駆られる時期である。母親がいなくなるのではないかと、母親に放棄されるのではないかとということが、不安の形で現れ、その結果、幼児たちには、強烈な傷つきやすさが観察されるという。またこの時期は、母親にとっても、対応が難しく、幼児の揺れ動く心の変化に巻き込まれやすくなってしまう。母親は幼児が母親を求めてきたときに受け入れ、幼児が自律的に行動しようとするときに幼

* 人間福祉相談センター ** 子ども学部子ども学科 *** 短期大学部幼児教育学科 **** 岐阜工業高等専門学校

表1 分離・個体化期のステージ

分化期 (生後4ヶ月から8ヶ月)	手足が自由に動かせるようになり、外界への興味関心が向いてまず母親を探索し始める。また自分の身体表象もかなりでき始める。この時期の後半に人見知りが始まり、愛着の対象がはっきりしてくる。
練習期 (生後8ヶ月から18ヶ月)	はいはいやよちよち歩きなど全身で移動が可能になり、自分の体を動かして母親から離れることをするようになる。外界の探索が盛んになり、興味を持ったものに集中して遊ぶ。しばらくすると母親の膝に戻りエネルギー補給をする。愛着の関係ができてくる。
再接近期 (生後15ヶ月から25ヶ月)	歩行が確立し、ひとりの世界が広がる半面、母親から離れてしまう不安をおぼえ、母親を求める気持ちも高まるので、再接近期という。自分で何でもやりたいという自律性、独立性を持つ半面、母親に甘えたいという依存性もあるので、葛藤状態に陥りやすい。
個体化期 (生後24ヶ月から36ヶ月)	現実検討能力が高まり、言葉を使えるようになるので、時間の概念ができ始め、待つことやがまんすることが少しずつ可能になってくる。ごっこ遊びをするようになり、嘘と現実をないまぜにして楽しむ。自己像や他者像を全体像として統合し認識できるようになり、母親との間にほどよい距離がとれるようになり、他の子どもに対して関心を向けるようになる。

(注) マーラー (1975) に基づき、渡辺(2000)、馬場(2008) の分類を参考にして、第一筆者がまとめたものである。

児を突き放すような対応をすると、母子間の関係調節が困難になり、最適な母子間の距離がとりにくくなる、そしてその後の子どもの心の発達に重大な影響をもたらすとマーラーは指摘し、これを再接近期危機と呼んでいる。この時期に母子間の関係に不調が続くと、子どもの生涯にわたって、性格の形成や対人関係のとり方に影響を与えるという(渡辺、2000; 馬場、2008)。

では、この再接近期の危機を抱える親子に対し、どのような支援が求められるのか。ポウルビィもいうように、内的ワーキングモデルができ、子どもと母親がしっかりと愛着の関係を築くためには、何が必要であろうか。

すなわち、就園時に、園の生活をなかなか受け入れられず、友だちや保育者となじめない子どもたちには、マーラーのいう分離個体化の時期の再接近期のつまづきを視野に置き、ポウルビィのいう内的ワーキングモデルを形成していくための援助が重要になる。そうしたことが、エリクソンのいう「自律性」や「自発性」の基盤になる「基本的信頼」を構築していく上でも重要になるであら

う。その意味で、乳幼児期の発達段階をさかのぼって、子どもと養育者の関係支援を展開しうための方策を考えていくことが重要であろう。

上記の問題意識をもとに、本報告では、母親に対する愛着が薄く、幼稚園生活になじめない年中児とその母親の事例報告を行った。事例を分析することを通し、母子間の愛着の形成を支援していく上で、母子並行面接とプレイセラピーの意義や有効性を明らかにしたい。

II. 方法

1. 手続き

相談時のカルテおよび、母親からの聴取事項、母子の面接の記録をもとに分析した。

面接は、週1回、50分の枠組みで、プレイセラピーは第四筆者が担当し、第一筆者が母親面接を担当した。(以降、プレイセラピーを担当したセラピストをT1、母親面接を担当したセラピストをT2として記述する)

面接実施期間は、X年5月から12月であった。本報告はそのうち、5月から8月までを検討した。

2. 事例の概要

A児。幼稚園年中の男児。4才児

出生後、特記事項なし。後ずさりのずり這いをした後、つかまり立ちをして歩き始めたのが、10ヶ月で、ハイハイはしなかった。1歳の誕生日前に、「パパ」「ママ」などの有意味語を話し、1歳の誕生日を過ぎてからは、順調に語彙が増えた。2語文・3語文も発話し、文字にも興味を持ち出し、年齢に比して早めの発達だった。乳幼児健診などで問題や遅れを指摘されたことはない。やんちゃで腕白なところはあったが、男の子の成長のうちだと両親や父方祖父母は受け止めていた。

家族構成は、父(30代)会社員、母(30代)専業主婦、妹B子(1歳)である。

しかし、就園後、登園渋りを示し、A児が「幼稚園へ行きたくない」とやんちゃを言い出した時、母親は、「今まで順調な発達だったのになぜ」という気持ちが強く、とてもショックだったという。幼稚園では、教室から飛び出し、友だちに手が出てしまうことが頻繁にあり、行事では走り回っていた。

またA児は、整列を嫌がり、お遊戯、歌、合奏等一斉活動を敬遠しがちであった。かけっこは大好きで足は速いが、年少の運動会には参加しようとせず、保育者が参加させようとすると逃げ回っていた。また音楽や劇の発表会にも参加しなかった。ひとりでいることが多く、他児を相手にして遊ぶという経験はなかった。

家庭では、A児は肉食恐竜や鮫、わに、カブト虫、クワガタ虫が大好きだった。そしてこれらの動物のイメージを「強い、ガブガブ食べる」と口癖のように言った。物語やおはなし系の絵本より、凶鑑類を好むところがあっ

た。

母親が、身体に触れることについては多少許すが、抱こうとすると体を弓なりにした。祖母や保育者に肩を抱かれキスをされそうになると逃げた。またそれらの人々の膝に乗ることや、自分からスキンシップをすることなどはあまり見られなかった。

寝付きはよいが、父親の帰宅を楽しみに待っているため、寝るのは11時過ぎになっていた。また、夜中に目が覚めることがよくあった。しかし、朝は6時前に起きてしまい、起き抜けの機嫌が悪いなどの睡眠に関する問題が見られた。食べるものが限られておりアイスクリーム・お菓子は特定の銘柄を好んで食べるが、それ以外のメーカーのものは、アイスクリーム・お菓子と認めないところがあった。野菜は食べず、食事はご飯だけというときが続くことがあるなど、食べ物にこだわりや偏食が見られた。暑いとぐったりとして、聞き分けがなくなり、やんちゃを言う。疲れたときも同じような状態になり、衝動的な行動が多くなるなど、体温調整にもむずかしさが見られた。

こうした生理的不快状態やこだわりが強い時には、母親や妹に対して、叩く・蹴るなどの行動をとり、しつこく続けることがあった。反面、祖父が大好きで、母親が同行しなくても平気で祖父とどこへでも遊びに行くことはあった。

III. 結果

事例の見立てと援助方針

1. 初来談時の様子

A児は母親より先に相談室に来た。そして帰るときも児の方が先に駐車場へ行ってしまった。この行動はその後のセッションでも続いた。

場所見知り、人見知りがなく、許可なくプレイルーム(以降、PRと記述する)に入り、すぐに置いてあったおもちゃで遊び始めた。あとから来た母親が後ろから抱きあげて引き寄せようとするが、すり抜けて児の興味のあるおもちゃを取りに行こうとする。

視線が合わず、落ち着きがない。たえず動いている状態が見られた。遊びに没頭して聞いていないようにみえるが、母親とT2の話聞いており、内容は把握している、時々会話に入ってきた。体の動きを止め、相手の顔を見て挨拶や会話する事が少ない。目に入る遊びやものに次々と手を出した。たとえばあるものが目に入り、興味をもつと、今まで持っていたおもちゃをどこかに置くことをせず即座に手から落とし、次のおもちゃを手を取った。

はさみを器用に取り扱い、折り紙、工作など、自らのイメージする生き物や題材ならば雑ではあるが集中してスピーディに作った。階段の上り下りはとても上手で年中の子どもとは思えない俊敏な動きであった。

2. 検査によるアセスメント

本児の発達状態を明らかにするために、初来談時に母親から聞き取りを行い遠城寺式・乳幼児分析的発達検査を実施した。検査では、ほぼ生活年齢相当の発達がある。しかし、質問項目のうち、「ブランコの動きに合わせて体を動かし、こいでいくことができる(移動運動)」「砂場では二人以上で協力して一つの山を作る(対人関係)」「左右がわかる(言語理解)」などが年齢に比べての遅れがあった。

また、聞き取りからは、「落ち着きがない」、「集団に入りにくい」、「まわりの刺激が気になり人の話を聞いていない」状況があった。

以上のことから、A児は、年齢相応の発達があり運動能力に俊敏さをもつ一方で、不器用さや身体を動かすことに苦手があるなど、アンバランスな傾向がある。それによって、友だちと協同して遊ぶことや集団に入りにくさがあるのではないかと、また刺激への過敏性があるために、周囲の刺激に関心が移りやすく、集中しにくい傾向のあることが見受けられた。

3. 援助課題と方針

母親へのインテークと検査による見立てから以下の援助方針を立てた。

① 援助課題

発達検査の結果から、年齢相応の発達が見られるが、発達のアンバランスさ、感覚過敏、多動などがあり、集団に適応していくには、多くの発達課題を抱えることが明らかになった。そして、それが、母親が育てにくさを抱える要因になるのではと考えられた。また、母親への愛着が薄く、ひとりで行動する場面が目立つことから、母子関係を構築していく上での課題があった。

② A児への援助方針

乳幼児の段階の母親との交流につまずきがあり、そこでの問題を現在まで持ち越している可能性が推察された。そこで、母子の関係性の構築を行う上で、まずセラピストを「大好きな大人」と認めるよう、安心感と活動に達成感を見いだせるような関わりを行った。そうした関係性の構築を目指しながら、「自分ひとりでやってみたい」「自分の魅かれることに集中したい」という気持ちを受け入れ、見守っていくことを援助方針とした。そしてA児の活動にセラピストが介入できるチャンスを逃さないようにし、A児がセラピストへの愛着を持てるよう配慮し、人に甘えることが心地良いものであることを体験させるようにした。

また、A児は、興味関心のある遊びに没頭してしまい、気持ちの切り替えがつきにくい傾向があることから、例えばプレイの始まりと終わりに「こんにちは」「さようなら」の挨拶をするなど、場面の切り替わりを明確にするようにした。

③ 母親への援助方針

母親は日々繰り返されるA児との衝突や、幼稚園の生活が2年目になるのにいまだになじめないA児の子育てに対して焦りを感じていた。またA児が、父親や父方祖父になつき、母親の働きかけを拒否することが多いことから、この状態が継続すると、母親がA児との結びつきをつくることをあきらめてしまうことが懸念された。そこで、母親に対して、そうした子育ての疲れや困難を受容しつつ、A児の態度や行動がどんな意味を持つのかについて理解を深める援助が必要であると考えた。そのため、母親とともに、A児の態度や行動の様子を吟味し、母子の交流するきっかけとして、どんなことに着目していくのかを話し合っていくことを援助方針とした。

面接の経過

プレイセラピーおよび母親面接の経過を報告する。なお、経過は、二期に分けて整理された。

1. 第1期(第1回～第4回)

この期は、A児へのプレイセラピーでは、A児がセラピストを意識して行く時期であった。また、母親面接では、セラピストが母親の子育ての困難さを受容しつつ、母親がA児の行動の意味を理解していく時期であった。

以下に、母親面接と児プレイについて列記する。以降、A児並びに母親の言葉を「」、セラピストの言葉を〈〉で示す。

第1回 (X年5月6日)

1) A児へのプレイセラピー：A児が幼稚園行事である遠足に参加したため、プレイセラピーは行われなかった。
2) 母親面接：母親は入室するなり、一気に話し出した。その内容は、次のようであった。朝起きると、A児の「幼稚園行きたくない」が始まり、幼稚園に連れていくと、抵抗して上靴を履こうとせず、そのため、なだめすかして、先生に連れて行ってもらったということだった。また、年中児クラス初めての行事であるお遊戯会では、いつものように走り回ると思い、覚悟して参観したが、自分にべったりくっついていて、拍子抜けしてしまった。走り回ることにはしなかったのではあったが、結局参加できなかったことには変わりがない。母親は何とか通園できたことに安堵はしているものの、行事にきちんと参加できないことに焦りを感じていることがうかがえた。また、母親は、A児が幼稚園で、新聞紙を丸めた剣で、戦いごっこをすると、友だちを泣かしてしまうほど熱中する。保育者が止めてもやり続けるので、保育者から苦情を言われてしまったというエピソードを話した。A児は、幼稚園から帰ってくると疲れていて、妹をいじめ、母親である自分には、くどくど文句を言う。最後には、「幼稚園に行く代わりにおもちゃ買って」と交換条件を出してくることで、自分もくたびれてしまうので、A児のやんちゃがひどい時には、要求に応じてお菓子を

買ってしまふ。情けない、と話した。このように、母親はA児の言動に振り回され、とてもいらいらしている様子だった。そんな母親の気持ちを受容しつつ、T2が、〈このごろ、児の様子を見ていて、何か、ほっとしたこと、安心できたことはありませんか〉と尋ねた。母親は、考え込んだ様子で、「近所の友だち(以降C君)の家で、いっしょに遊ぶことができました」と話した。他の子と一緒に遊ぶことができたのはこの時が初めてだった(C君は同学年で、幼稚園はちがうという)。「スーパーのゲームコーナーでよく会っていたが、C君の母親から『うちにきていっしょに遊ばない?』と声を掛けられ、A児と妹を連れてC君の家にお邪魔しました」とA児が他の友だちとの関わりを示した場面を話した。

次に、T2が〈園の行事に参加しなかったのは、進級で、先生、友だち、教室などが変わり多少の不安があったかもしれない。おかあさんにくっついて不安をやり過ぎていたのではないかと〉A児の行動を認めて話した。すると、母親は「そういえばこのごろ妙にべたべたくっついてくることがある」と言い、母親への甘えについて話し出した。そこでT2はそれがどういう時なのかをよく観察してほしいと依頼した。

母親は、とても疲れている様子だったが、あふれんばかりに園や家庭での様子を話したため、T2は、傾聴に努めた。母親の話は、A児に困っていることが中心であったが、上記のように、T2の話しかけに応じて、A児の肯定的な面も見出す姿が見られるセッションであった。

第2回 (X年6月10日)

1) A児へのプレイセラピー：〈こんにちは〉とT1が挨拶すると、A児は顔を向けて挨拶したが、目は合わせなかった。その後、PRにあるおもちゃで次々と遊んだ。ドールハウス、飛び出す絵本、自動車、ビニールのトンネル、すべり台、マット、パトミントン、トラックなどで遊んだ後、PRを突然飛び出して、隣の箱庭の置いてある部屋に入り込む。そこでは、鯨やワニのフィギュアに目を輝かせた。

部屋には箱庭がふたつあり、A児は、ひとつ目の箱庭に、鯨、ワニ、恐竜を置き、ふたつ目の箱庭には、城、タワー、木、病院、電車、戦車、自動車を置いた。ひとつ目には、弱肉強食の闘いの世界、ふたつ目には、人が暮らす日常の世界が描かれていた。A児は、片手に鯨、もう一方の手に恐竜を持ち、闘わせた。「ガオ、ドシ、ドシ、ドーン」と声を盛んに出していた。

終了の時間になったので、T1が〈終わろうね〉と促したが、A児は鯨と恐竜の闘いに熱中していた。もう一度促すとA児は、「この鯨お母さんに見せてくる」と部屋を飛び出し、母親のいる面接室へ入り込んだ。そこでA児が母親に鯨を見せてから、T1が〈さようなら〉と言うと、顔を合わせず、鯨を触りながら小さな声で「さようなら」と言った。

このように、A児には、精一杯遊んだ後、母親におも

ちゃを見せるという姿が見られた。しかし、遊びだすとやめるという行動の切り替えができず、自分の遊び足りない気持ちを母親のそばでなだめているようにも見えた。2) 母親面接：母親から幼稚園での様子が話された。A児は、幼稚園で遠足へ行って、友だちと並んで保育者の話を聴くことができず、飛び回っていたようである。A児担当の保育者にお菓子をあげると言われると、保育者とは遊ぶことができ、何か褒美があると指示に従えた。しかしいったん褒美をもらってしまうと、虫を捕まえたり山に登ったりと一人遊びをし、友だちと遊ぶことはできなかった。第1回で報告のあったC君とは、さらに行き来があり、幼稚園帰宅後、いっしょに遊んでいるという。毎朝、A児は「今日、C君と遊べるか、電話できいておいて」と母親に頼んでいる。

A児はおもちゃを片づけないため、母親に叱られると、「おもちゃ捨てるよ」と言う。すると母親は「いいよ、A君が困るだけだから」と答えた。A児は、「いっしょに寝てあげない」と応戦し、母親は「いいよ、Bちゃんと寝るから」と言う。するとA児は負けまいと「ご飯、食べてあげない」と言い、母親が「いいよ、A君が大きくなれないだけだから」と返したという。こうしたやりとりの後、A児はすねて、洗濯物かけの枠をカーテンで覆ったA児の作った隠れ家に立てこもった。しかし30分くらいすると、叱られたことを忘れて出てきたという。

母親がこのやりとりをそのまま終わらせるのはよくないと思い、就寝前に「Aちゃんが悪かったでしょう」と言いかけると、A児は「ごめんなさい」と言う。

しかし、いつも妹を叩いたり蹴ったりしているのに、最近では妹と二人で"おかあさんといっしょ"をみていた。こんな事もあるのだ、と母親は安心したように述べた。

「C君と遊べるかどうか、きいて」とA児が言うことは、C君と遊ぶことを楽しみにして、幼稚園に行くことができるからだろうとT2は、母親に指摘した。

またT2は、A児がおもちゃを片づけないことに対して、児と母親の言い合いが続き、このままでは、母子の気持ちが離れたままになるのではないかと考えた。母親が、A児の気持ちを受け止め、理解していくことが必要に思われた。その意味で、就寝する前に母親がA児とおもちゃを片づけなかったことを話し合い、両方の気持ちを納めたことは重要であることを母親に伝えた。母親は黙ってうなずいていた。

第3回 (X年6月17日)

1) A児プレイ：〈おはよう〉とT1が挨拶するが、A児は顔を合わせなかった。母親が挨拶を促すと、さっさと一人で箱庭の部屋に入ってしまった。

今回も動物(恐竜、わに、蛇)をおいた箱庭と、建物(病院、城、学校、家など)をおいた箱庭を作った。柵に興味のあるフィギュアを見つけると、今まで持っていたフィギュアを手から落とし、新しいフィギュアをつかむ。落としたことすら意識していないように見える。遊

びながら「もう、お母さん来る?」「もう帰る?」と盛んに時間を気にするので、T1が〈まだ遊べるよ〉と言うと安心した。

時間の後半は、ロープの付いた自動車に積み木をいっぱい入れた箱を結びつけて、A児が自動車にまたがって引っ張ろうとした。A児は、ロープを結びつけるのがむずかしそうなので、T1は手伝おうと思うが、A児はT1を頼ることなく自分で結びつけた。自動車にまたがり、「うっ」と声を出して何度も足を踏ん張るが、自動車は動かなかった。そのため、「先生押して」と助けを求めてきた。T1が押して、A児が自動車にまたがり、ふたりに部屋をぐるぐる回った。

その後、A児は箱庭の部屋に戻り、建物を置いた箱庭の中央に戦車、車、水車を置き、ピストルを持った人を戦車の横に置いた。そして芝生のある家の前にサスペンダーをして登山帽をかぶった男の子を置いた。T1にはその男の子は何となくA児に似ているように思えた。もうひとつの動物の箱庭では鯨にいろいろな動物をばくばく食べさせた。〈わあ、もうおなかいっぱい〉「まだだよ」児はまだ鯨の口に砂を入れようとした。

T1が時間の終了になったことを告げても、遊びをやめなかった。三度うながすと、「お母さんに見せてくる」とA児は、鯨を持って飛び出す。母親のところで、T1が〈さようなら〉と言うが、挨拶しないので、母親に無理やりお辞儀をさせられる。A児は、口を固く結んで意地でも挨拶しない、という姿であった。

2) 母親面接：母親からは、A児はスーパーに行くと、自分の行きたいところへ行ってしまうが、このごろは母親の姿を見失うと、「おかあさん」と呼んで母親の所在を確かめるようになったことが報告された。

また、幼稚園には相変わらず「行くのいや」とごねると報告があった。しかし、園では、D君という友だちができたので、行くのが嫌だとやんちゃを言う時、母親が「D君が幼稚園で待っているよ、いっしょに団子虫見つけたら」と言う気持ちで動くようで、やんちゃのトーンがやや下がるという。「早く行こう」と急かすことをやめて、幼稚園でやることをいろいろイメージさせると、ちょっとしたきっかけで、気持ちの切り替えができるような感じがする、と母親は述べ、幼稚園に登園させる上でのコツを発見したようであった。

T2がこうしたA児の変化を認め、〈A児は、スーパーでは母親を呼ぶなど少しずつ母親の存在が気になっている、幼稚園でも、友達と行動することの楽しさに気付き始めている〉と指摘した。母親は、「友だちと遊ぶ楽しみを期待しながら、目の前のいやなことをがまんしていく力が少しずつ付いているようだ」と述べ、A児の変化を共有できた。

第4回 (X年6月24日)

1) 児へのプレイセラピー：〈おはよう〉のT1の挨拶にA児は持参したおもちゃを見ながら挨拶した。A児は、

廊下を走り回りPRに入ろうとせず、母親の面接室のドアのところでT2に対し、「おじさん」と叫んだ。T1が何とか促して、A児を箱庭の部屋に入れた。A児が砂を箱から外に出そうとするので、T1が注意するとA児は、「戦争おこるから先生外に出て」と言う。〈A君一人で遊ぶの?〉「そう」〈A君と遊びたいからここにいろ〉「先生打たれちゃうよ」〈撃たれても我慢するから〉するとA児は、箱庭に城や塔を入れて大砲を置く。「発射」と言って、砂をつかんで投げる。T1は児を後ろから抱いて捕まえ、〈お砂出してだめ、ここで遊べないよ〉「ここで遊ぶ」〈じゃあ約束〉「うん」A児は、砂を出さずに、戦争ごっこを続ける。飛行機、戦車、船などを次々と手にする。新しいものを手に取ると、今まで手にしていたおもちゃを離れた。

今度は、A児は、部屋の隅の蛇口を開け、置いてあるおもちゃを水に濡らした。それを数回繰り返し、T1もその都度注意した。

プレイセラピーの終了後に、T1が〈さようなら〉と言うと、「さようなら、おじさん」と叫んで飛び出して行った。T1、T2が女性であるのに、「おじさん」と挑発的な呼び方をする裏には、A児がセラピストに関心を向け、わざと違ったことを言っているようであった。

2) 母親面接：母親からは、次のことが報告された。昨日まで3日間、家族で潮干狩りをし、テーマパークへ出かけた。1年前にも同じところに行き、A児は慣れているせいか、走り回ったので、母親は疲れてしまった。しかし旅ができ、母親はリフレッシュできたということであった。潮干狩りでは、A児はあちこち飛び回り、たくさんアサリを取り、家族に分けてくれた。A児が人にもものを分け与えたのは初めてのことだったと母親はうれしそうに語った。A児の幼いころに「おちょうだい」「どうぞ」というもののやり取りを母親は何度も試みたが、A児は関心を示さず、今やっとそれができたと母親は喜んだ。

この旅では、かなり長時間自動車で移動したが、動きの多いA児が、シートベルトをきちんとして、風景をじっと見ていたと母親は語った。父親が道に迷うと、標識の意味を一生懸命に考え、去年の記憶をたどりながら、父親のナビゲートをしたという。それがだいたい正しかったので、「我が子ながらすごい記憶力だ」と両親は感心したという。

1歳と4歳の子を連れて旅をしてきた両親の熱意とA児の集中力に、T2は感心した。しかし、A児の長旅の疲れが気になり、「A君は強行軍のためずいぶんと疲れているのではないかと付け足した。実際、いつも以上にプレイは大変な様子であるということが、面接室にいても伝わってきた。

1期のまとめ

A児のプレイセラピーでは、A児は様々な遊びに次々と手を出し、PRをとび出し走り回る姿が見られた。A児は遊びを展開する過程で、T1とあまり関わろうとせず、大人の手助けが必要な場面でも、T1になかなか援助を求めようとはしなかった。プレイセラピーの始まりや終了も明瞭ではなく、特にプレイセラピーの終わりを告げられても自分で遊びを止めることができにくい状態だった。

そしてA児は、箱庭に興味を持ったようである。箱庭を二つ用いて、一つには、肉食動物の闘いの世界を作り、強い動物に弱い動物をガブガブと食べさせた。もう一方の箱庭には、病院、学校、家などを配置した(第2回、第3回)。第4回では、A児は戦争を起こし、箱から砂を投げ、二つの箱庭の世界をこわしてしまった。T1は、A児の砂を投げる行為を止め、ルールを守らせた。

母親面接では、当初、母親は、A児の行動を困ったこととして捉えがちであったが、T2との交流の過程で、A児の行動に肯定的な面を見出すようになった。

また母親は、A児の行動の中で、気付いた点があると、それをA児への対応に反映させた。例えば、A児には、ごほうびや先の楽しみが有効であることに気づくと、それを利用して、A児のやんちゃへの対応を変化させた。そして、母親は、A児なりの成長に安んじや喜びを少しづつ感じるできるようになった。

2. 第2期(第5回～第7回)

この期は、プレイセラピーでは、A児がセラピストの示す構造の中で、遊びを展開するようになる時期であり、母親面接では、母親がA児の行動を理解した上で、A児の気持ちに対応した動きをするようになる時期であった。

第5回(X年7月1日)

1) A児へのプレイセラピー：T1の挨拶にA児は横を向いて挨拶した。笛を吹き、飛び出す絵本を見て、ダーツの的におもちゃの玉子を当てた後、PRを出て待合室の机の下に隠れた。T1が〈あ、見つけた〉と言うと、にっこり笑って出てきて、ラックにあった乗り物の絵本をいっしょに見た。「僕、乗り物では機関車、生き物ではお魚が好きだよ」と言った。

絵本を読み終わると廊下を走り回り、追いかけるとまた待合室に戻り、机に置いてあった相撲ゴマを始めた。そしてこれに熱中した。プレイの終わりを告げてもやり続け、やがてA児は、T1の膝にすわりコマを回した。ちょうど面接室から出た母親が、T1の膝にA児が乗っている光景を見て、驚かれた様子であった。

T1がプレイの終わりを告げると、A児は挨拶もせず黙って待合室を出ていった。母親が後を追いつつ、第5回は終わったが、T2には、この時、何かしら気まずいムードが、T1-児-母親の間で流れたように感じた。母親

にさえなかなか抱かれようとしないうA児が、まだ数回しか会ったことのないT1の膝にのって楽しく遊んだという事実を、母親は、「セラピストは子どもとうまくやれるが、自分にはできない」と受け止めたのではないかとT2は危惧した。そして、母親へのフォローが緊急に必要だと感じた。

2) 母親面接：母親はA児が熱中して人気の「ゴレンジャー」の番組を視聴したり、父親とボクシングの中継を見るため、妹に対する乱暴が最近エスカレートしていると話し出した。

また、A児は夜中に時々目を覚まし、母親を呼ぶので、母親がすぐ行って児の背中をトントンとたたくと寝入るという。タイミングを外すとぐずってなかなか寝ないそうである。ふだん朝は機嫌が悪いが、そういうときの朝はさらに悪いという。

そこで、T2が園から帰ってからの生活を尋ねた。A児は、母親と買い物に行き、スーパーのゲームコーナーでゲームをする。しかし一度二度では終わらず、1時間以上やり続け、さらにやりたがるので、親子げんかになり、母親がA児をひきずるようにやめさせるという話があった。帰宅後はおもちゃで遊びながら、TVをだらだらと見ているため、TVを切ろうとすると、ものすごく怒るといふ。

A児は、父親の帰りを待つため、就寝は11時過ぎになることも報告された。T2は、母親の子育ての大変さは十分了解でき、「お母さんはまるで、24時間営業のコンビニエンスストアのように、よく頑張っている」と労った。

母親は、児のやんちゃについて、父方祖父母から、「このくらいのやんちゃは男なら元気があってけっこう」と言われてきた。しかし、幼稚園では不応を起し、様々な面で保育者から指摘を受けなければならず、祖父母と幼稚園の板挟み状態のようだった。

母親の来室の目的は、自分のやっていることに対して、セラピストから同意や支持を得ることだったのだろう。やんちゃのひどい時に、交換条件としてお菓子やおもちゃを買い与えることや、スーパーで駄々をこねるので、言われるままにゲームを続けさせてしまうことに対して、母親はどうしようもないのだと訴え、T2もやむを得ないことだと同意した。

T2はA児の睡眠時間が不足していることを指摘し、TVの視聴も、A児のみたいものについて始めと終わりをはっきりさせたみせ方をする方がいいのではないかと提案した。またゲーム以外のものに関心が行くような働きかけをしてほしいと伝えた。

母親はこの面接のあと、A児がものづくりに興味のあることから、リビングにもものづくりコーナーをつくり、牛乳パックやペットボトル、はさみ、糊、テープ、カラーペンを常備し、いつでも児が遊び出せるようにした。

第6回 (X年7月8日)

1) 児へのプレイセラピー：〈こんにちは〉とT1が挨拶すると、A児は待合室に置いてあったおもちゃに気を取られていて、何も反応がない。再度挨拶すると「こんにちは」という応答があった。A児は先週見た乗り物絵本をT1と見た。

そして箱庭の部屋へ入った。A児は箱庭の中に8頭の恐竜を置き、両手に1頭ずつ恐竜を持ち、闘わせた。「肉食恐竜、他にもいるんだよ」〈ふーん。肉食恐竜は何を食べるの?〉「肉や恐竜、肉食恐竜だもん」第2回、第3回、第4回のような闘いの叫び声は上げず、A児は静かに遊んでおり、T1は見守る。それからさらに棚から恐竜を出し全部で12頭になる。一番小さい恐竜を「これ、赤ちゃんの恐竜」と言って箱庭に置く。〈そう、小さいもんね〉とT1が言うと、A児は、骸骨恐竜も置いて、「これは食べられて骨になった恐竜」と言う。そして、木を置いてその葉を食べる恐竜も置き、真ん中の海では鯨と恐竜を闘わせた。箱庭の角には2頭の恐竜を埋めた。テーマは「闘い」だが、落ち着いたムードでじっくり遊んでいた。残り10分でT1とA児は、ゴルフやダーツをして遊んだ。A児が、プレイルームで、ゴルフやダーツのようなルールのある遊びをしたのは初めてだった。帰りにA児は小さい声で「さようなら」とT1の顔を見て挨拶した。

2) 母親面接：最近のA児の様子を母親に話してもらい、2ヶ月前の児の様子と比較しながら振り返った。

幼稚園では、七夕発表会があった。会の形式がかなりラフなものだったが、他の子どもたちと同じ程度の参加ができたという。やはり朝は「行きたくない」とやんちゃを言うが、帰宅したときの顔つきは割と穏やかであるという。園では、D君とよく遊んでいる。また、偏食が緩和して、給食を少し食べるようになった。さらに、年少組の教室へは入らなくなり、自分の教室にいるようになっている。並ぶことが嫌がり列から離れていることが多かったが、つかず離れずの状態でクラスの列の近くにいるということが報告された。

家庭では、母親が生活時間の見直しをし、家族で土日も早く起きるようになったことが話された。A児は朝ご飯を食べる時間や寝る時間をかなり意識して時計を見ながら、母親に時刻を教えてくれるという。またC君とよく遊び、二人でならスーパーのゲームを2,3回で我慢することができる。図鑑好きだが、母親が物語を読み聴かせることが初めてできた。旅人が怪物にガブガブ食べられそうになるのを命からがら逃げるという話の設定がA児の好みに合っており、何度も読み聴かせを求めてきた。A児は「ガブガブ」というところが大好きであるという話が母親からあった。

一方、心配なこととして、母親は次のことを話した。A児は暑さに弱く、最近の暑さですますぐったりする

ようになったという。またC君のきょうだいをかわいがるのに、自分の妹を手加減せずしつこくいじめることが心配のようである。母親が近所の子どもを抱いていた時も、まだ赤ちゃんなのに手加減せず叩いてきたので、びっくりしたという。

またA児は朝起きたときに、母親が横にいないと不機嫌で、自分のそばに呼び寄せる。そして卵の一連のパフォーマンスをしないと気が済まない。「卵のパフォーマンス」とは母親が名付けたもので、次のようなことである。

はじめにA児が母親に「卵がパッカーンと割れました」と言うように要求するので、母親が「卵がパッカーンと割れました」と言うと、A児が「赤ちゃんが生まれました」と言い、母親に自分を強く抱きしめるように指示するので、母親がA児を抱きかかえ、「ムギュウ」と抱きしめる。それからA児は「赤ちゃんは歩けません」と叫ぶので、トイレまで連れていき用を済ませさせる。さらにA児は母親に服を着せるように要求し、母親が応じないとやんちゃを言い出す。朝の忙しいときにいろいろ要求するので、下の子が起き出しそちらの世話もせねばならず、夫も送り出さねばならないので大変である。母親が気持ちを込めずにパフォーマンスに参加すると、A児は猛然と怒り、いらいらし始めるという。

それから母親は前回A児がT1の膝の上にすわったことにとっても驚いた、そのようなことは父親に対してもほとんどしたことなかったと言った。しかし、前回(第5回)でT2が危惧したほど、母親はこのことにこだわってはいない様子だった。

むしろ母親は「卵のパフォーマンス」について、A児が急に幼くなり、抱っこや排せつの世話、服の着替えを要求することに、当惑していた。しかも朝の忙しい時に要求し、少しでも手を抜くと児が敏感に察知し、猛然と怒り出すので、腹立たしささえ覚えていた。

T2には、卵のパフォーマンスが母子の相互作用であり、愛着成立のシステムそのものであると思われた。「パッカーン」という言葉の響きに、A児の望んでいる朝の始まりが感じられ、パフォーマンスには児が理想とした誕生と成長の物語がコンパクトに詰まっているようだった。「パフォーマンスを毎朝完璧にできたら、すっきり起きるよ」とA児が伝えているように感じられた。そこで、T2は、母親に「卵のパフォーマンス」をししばらく続けることを提案した。すると母親は意外にすんなりと同意した。おそらく母親もA児の始めた卵のパフォーマンスがなにか大切な意味を持つと感じ取っていたに違いない。

第7回(X年7月15日)

プレイルームのエアコンの調子が悪く、A児のプレイは、母親とT2の面接室で、A児、母親、T1、T2の4人で行われた。面接室は手狭なので、あらかじめ、T2が、パズルや色紙、クレヨン、はさみ、のりなどを用意しておいた。

まず動物のパズルをした。A児は、カメレオンなどの爬虫類を「大好き」と言いながら一生懸命組み合わせた。うさぎ、りす、しまうまなどは組み合わせようとせず、はらいのけるようにカードを机から落とし、「嫌い」と言った。

母親がやらせようと後ろから抱いたが、A児は、すり抜けておもちゃのやかんを持ち、水を入れたがった。母親から「だめ」と言われると、折り紙の箱を勝手に持ってきた。母親から「『〇色の折り紙を下さい』と言わなきゃだめ」と言われるが、言わない。A児は折り紙をわしづかみにして箱から取り出した。

そして銀色と黄緑色の折り紙の両角を半分に折った。母親はA児が何を作ろうとしているのか察しが付いたらしく、折りにくいところを手伝った。母親とA児の息がぴったり合っていると感じられた。T1、T2は児の手元を見ながら「半分に折ったね、とんがってるね、つんつんだ、ふたつをくつつけるんだ」と言葉がけをした。「次にやることはこれでしょ」と母親がクレヨンをさし出すと、児は折り紙に黒いクレヨンで目を描いた。それから赤いクレヨンで血管を描き目が血走っている様子を表した。「こわい目だなあ、やさしい目はないの」とT2が尋ねると「やさしい目をしているのはこぼん鮫だよ」とA児は答えた。そして鮫が折りがり、児は筒状になっているところに手を入れて、「ガオーッ、ガオーッ」と鮫になって動き回った。それから大きな声で「ピンクの折り紙を下さい。」「オレンジの折り紙下さい。」と上機嫌で言った。

今度ははさみでさかんに切り込みを入れる。T2が「ザックザックたくさん切ってるね」と児の動きに合わせて言うと、母親はまた察しがついて「えいをつくっているの?」と尋ねた。しかし、A児の思ったような形にならないのか、最後はただ紙を切るだけになった。

第8回 第9回 第10回

(X年7月31日)(X年8月7日)(X年8月20日)

夏休み中のため、母親のみ面接を行った。母親は、暑いので、A児は機嫌が悪いと訴えた。また近所のC君が夏風邪で遊べないため、不満がたまり、妹を叩いたり、母親を蹴ったりすることが多いという。

父親のいる日はA児をプールへ連れていくという。A児は疲れてパタンと寝ないと、夜遅くまで起きていて、ぐずりが激しいので、プールが大好きということを最大限に利用するという話であった。しかしA児は母親や妹とビーチボールや浮き輪で水と戯れるような遊びを一切しない。A児は、水に浮くこともできないのに、クロールで泳ぎたいと思っているらしいと母親は話した。A児は、真剣な顔つきをして、プールサイドから水に飛び込み、手足をばたばたさせている。結局沈んでしまうが、1時間以上、黙々とクロールを練習しているという。

またA児は、蝉取りや魚取りが好きで1,2時間熱中しているという話もあった。しかし、蝉なら羽の透き通っ

たもの、魚なら腹がきらりと光るものというこだわりがあり、ねらう獲物が現れるまで、同じ姿勢でじっと待っているという。

母親とT2は、A児が、C君と遊べないことにごっかりしている様子から、友だちと遊ぶ楽しさを十分わかっている、と話し合った。T2が、「A君のクロールや蝉、魚に見せる代わりに、男の子ならではの大きな力を感じる」と言うと、母親は苦笑しながらもうれしそうだった。

2期のまとめ

プレイセラピーにおいて、A児はT1への愛着を示すようになる。

箱庭は二つ作ることから一つ作るのみとなり、第1期の肉食動物の闘い一色の世界から、赤ちゃん恐竜や草食恐竜などが存在する多様な世界へ変化した。

また母親に手伝ってもらって、折り紙をする姿が見られ、A児は、母親を受け入れている様子がうかがわれた。セラピーの開始・終了時のあいさつもなんとか定着してきた。

母親面接では、T2が母親の子育ての疲労感や困難さを受容する過程で、母親のA児への理解が進んで母子の交流が盛んになる。A児と母親の間で、卵のパフォーマンスが起こり、母子間の愛着関係がみられるようになった。

また、これに連動して、A児は友達と活発に関わるようになり、幼稚園での適応が進んだ。

IV. 考察

本論文は、母親との愛着が薄く幼稚園生活になじみにくさをもつ年中児に対して、母親との愛着の形成を支援する働きかけを行った実践の経過を報告したものである。本実践においてセラピストが留意したことは、①A児の自分でやってみたいという気持ちを尊重すること②プレイセラピーでは、A児の身近に控え関わることによって、A児が甘えることの安心感や心地良さを体験するのを支援すること③母親面接では、母親の子育ての困難さを受容するとともに、A児の発する言葉や行動に意味を見出し、A児に対する理解を深め、母子が交流を図るのを支援することの3点である。

約4ヶ月のプレイセラピーおよび母親面接の中で、母親の働きかけに拒否的で、ひとり行動が多く、幼稚園になじみにくさを持ったA児が、T1の存在を認め、交流することができるようになった。そして母親を求める気持ちを少しずつ出すようになった。例えば、「卵のパフォーマンス」のエピソードがそれを物語っている。ここでは、自分の誕生に立ち返り、母親とのつながりを強固なものとしたと推察できた。

このようなA児の成長と並行して、児は友だちと行動

することに楽しさを感じ、友だちとともに自分にとって受け入れ難いことを受け入れていく気持ちを育てていった。こうした人との関係の変化が幼稚園に適応していくことにつながっていった。

以下では、まずプレイセラピーの中で見られたA児の変化を検討する。そして、A児の心の成長や幼稚園での適応につながった母親のA児への理解の深まりや対応の変化について検討する。また、本事例は、渡辺久子からマーラーの理論を用いて本事例のコメントを得た。したがって、ここでは、マーラーの理論をふまえて指摘された渡辺(2011)のコメントをもとに、本母子並行面接について考察する。

1. 母子並行面接の経過の検討

① A児のプレイセラピーの中での変化について

A児は、1期ではプレイルームに入ってもまとまりのない行動でおもちゃを散らかしたり、突然部屋を飛び出すことが多かった。それが、だんだんセラピストを意識し、セラピストとともに、まとまりのある行動に変化していった。

2期では、セラピストに対して、愛着を示すようになり、セラピストの膝にのるような姿を見せている。セラピストと共に本を見たり、セラピストと会話しながら、落ち着いて箱庭遊びをした。

母親面接では、A児が母親にまわりつくことや、スーパーで母親を呼ぶ姿が報告されている。プレイセラピーにおいても、T1にプレイの終了を告げられると、母親のところへとんでいき、まだ遊びたい気持ちをなだめている姿も見られた。

このようなA児の行動は、マーラーの「分離・個体化」の発達段階に照らしてみると、外の世界を満喫していた子どもが、ふと母親を思い出し、母親を強く求める姿と重なりあうと渡辺(2011)は指摘する。第2回での母子のおもちゃの片づけを巡る言い合いは、A児が母親におもちゃを片づけることを要求され、素直に受け入れられない気持ちを、「おもちゃを捨てる」「母親と寝てあげない」という屈折した表現であらわしている。このようにA児は反抗的な言い方をしているが、その裏には、A児にとっておもちゃの片づけのような受け入れ難いことは、母親に付き添っていっしょにやってもらいたいという母親を求める気持ちの表れと見ることができる。これは、子どもが、自立的でありたいと同時に母親に甘えたい、自分をちゃんと見ていてほしいと願う「再接近期」の両面的な心性であり、マーラーが「再接近期の危機」と呼ぶものであると示唆された。

A児の心の世界は、まさにこの再接近期を生きているのではないかと渡辺(2011)は指摘した。

② 「ガブガブ食べる」ことときょうだいの存在

再接近期は、15ヶ月から24ヶ月に及ぶ。この時期に、A児はきょうだいの誕生を迎えていることに渡辺は着目

している。母親に自分を見てほしい、そばにいて、何でも自分と一緒にやってほしいという母親を独占したい気持ちが高まっていたときに、大きな邪魔が入ってしまったことの意味が大きいのではないかというのである。

おそらくA児には、母親に抱かれる赤ん坊の妹に対して激しい気持ちがおこり、それが「なんでもガブガブ食べる強い生き物」への志向となって、妹をしつこくいじめることにつながったと思われる。第7回のプレイで、児はワニ、とら、カメレオンといった動物のパズルを自分の領域に入れ、うさぎ、りす、しまうまをことごとく排除した。「強い、ガブガブと何でも食べてしまう」というA児の住む世界と、うさぎやりすなどの草食動物で象徴される「かわいらしくやさしい」という妹の住む世界が相いれないものとして、児の心に存在することが浮き彫りになっている。A児にとって、母親は、妹の世界に住み、自分は母と妹の世界には入れないと思込んでいるがゆえに、その葛藤が激しい攻撃性となってあらわれるのだろう。渡辺(2011)は、再接近期の分離不安や母親を失うことへの不安が存在する時期に、きょうだいの誕生によって、母親の愛情や承認をなかなか得られないと、幼児に深刻な葛藤をもたらすと指摘するが、今回の事例もそれが顕在化していると示唆された。

③ 箱庭の中で見られたA児の変化

A児の心の中には、ワニ、鮫、肉食恐竜という強い生き物の世界と、うさぎ、りすという小さくてかわいらしい生き物の世界が、互いに交じり合うことなく、両極にある。この極端さはプレイセラピーの中にも垣間見える。A児がT1に援助を全く求めない姿、今遊んでいたおもちゃから、他のおもちゃを手を取った時、今までのおもちゃは心から跡形もなく消えるように、手から落ちてしまうなど、極端さは随所に現れる。この傾向は、A児の作った箱庭にも表れていた。

第2回、第3回のプレイでは、A児は必ず二つの箱庭をつくり、一方には、恐竜や鮫の闘いの世界をつくり、もう一方には、病院や学校、おうちや鉄道を置いた日常的な世界をつくった。恐竜と鮫の箱庭では、鮫がガブガブと恐竜や小さい動物や砂を食べた。もう一つの建物と乗り物の世界には、兵士や大砲、戦車が入り、戦争が始まった。

第4回では、A児は「戦争おこる」と言って、箱庭の中に大砲を投げ入れ、砂を辺りに投げて、箱庭の中は混とんとした状態になった。T1が介入し、児に砂を投げるのをやめさせ、児の激しい動きに付き合った。

第6回では、箱庭は一つしか作らなくなる。箱庭の中央に砂をどけて湖をつくり、その中で、鮫と恐竜を闘わせた。湖の岸辺では、木の葉っぱを食べる恐竜、小さな赤ちゃん恐竜、砂に埋められた恐竜が置かれた。箱庭の中には、闘い一色ではなく、まだ小さくてよわよわしい赤ちゃん恐竜や、草食の恐竜、砂に埋まって静かにしている恐竜などが存在を許されてそこにいるという感じだっ

た。

また第7回では、血走った恐ろしい目を持つ鮫の絵を描きながらも、「やさしい目をした小判鮫」の存在をセラピストに話している。

A児は、自分の心の世界に、強いものと弱いもの、恐ろしいものとやさしいものが両極にあるのではなく、それらがいっしょにあってもよいことに気付き始めたと思われる。セラピストには、児が、ものごとには様々な面があり、それらをまるごと受け入れていくこと、統合していくことの端緒をつかんだようにとらえられた。渡辺(2000)はこのような子どもの再接近期の気づきは、「現実の生活には、嫌なこともよいこともあるけれど心配ないのだ」という物事を総合的にとらえ、健康的な現実検討能力を持っていく発達を促すと指摘しているが、今回の事例においてそれが明らかになっているといえよう。

2. プレイセラピーの意義と母子並行面接の働き

こうした本母子並行面接の経過の中でのA児と母親の関わりの変化を、マラーの理論をふまえて検討した。そこで見いだされた変化から、次に母子の愛着関係や基本的信頼を構築していく上で、プレイセラピーと母親面接の意義を考察したい。

① プレイセラピーが、母子の関係を活性化させる

児はプレイルームからよく飛び出し、セラピストから逃げた。しかしセラピストが追いつけないような逃げ方はせず、必ずつかまる。つかまえてほしいから逃げるのである。馬場(2008)は、これも再接近期のまわりつきであり、つかまえてもらうことを目標にして、つかまえてもらえるかどうかを確認していると述べている。

いつもA児のそばにいて、決して児の自立性を脅かすことをせず、やってはいけないことはきちんと指摘し、困った時にそっと手を添えてくれるというセラピストの姿勢は、母親を求めながらも自立性を保ちたいと願う再接近期の子ども両端に揺れ動く気持ちをうまく受け止めていると思われる。第5回では、A児は、T1のひざののって遊ぶようになった。

このようなセラピストとA児の関係は、母親とA児の関係も活性化させ、母親は、児に絵本の読み聞かせが初めてできたことや、卵のパフォーマンスを報告した。このようなことを、田中(1997)は、「セラピストの働きかけを受けて子どもの反応が刺激され、一方、母親は、セラピストと子どものやり取りで活性化する子どもを見て、母親自身が子どもに対する関わりを理解し、実行するようになる。そして母親と子どものやり取りが活性化する」と述べている。田中(1997)は、これを「母子相互作用を活性化させるアプローチ」と呼んでいる。絵本の読み聞かせや卵のパフォーマンスは今までにない、母子の情緒的なやりとりである。この母親には、A児とT1の関係を見て刺激を受け、自分とA児との関係を見直し、進展させていく強さがあると推察された。

② 母親面接の働き

母親の話から、日々の大変さは十分に理解でき、母親が疲れ果てて、A児にお菓子やおもちゃを買い与えることに対して、T2はやむを得ないことだと同意した。母親の来室の目的は、自分のやっていることに対して、セラピストから同意や支持を得ることだったと思われる。

しかしT2がこのように母親に同意や支持をした次の回では、母親は必ずA児との関わりを進展させていた。第2回で、A児はご褒美があると目の前の嫌なことを何とかがまんでくれることに母親が気付くと、第3回では、「友だちが待っているよ」「団子虫で遊べるよ」と先の楽しみを布置し、幼稚園へ行くという受け入れ難いことを乗り切らせた。また第5回で、ゲーム以外にA児が興味を持つことを設定すべきだという提案を受けると、さっそく自宅のリビングに「ものづくりコーナー」をつくった。田中(1997)は、人には本来、自分で自分をよりよい方向に導いていこうとする「自助の作用」があるという。批判や否定をされることなく、誰かに静かに見守られると、母親自身に内在されていた考え、実行していく力が動き出していく。母親面接は、こうした「自助の作用」を引き出していくことに大いに貢献できたと思われる。

③ 母子並行面接の意義

愛着の絆の薄い母子にとって、面接という場は、様々な関係を活性化させる発信源だった。T1が砂を投げるA児に対して、「砂を投げない」ことを約束させ、A児が箱庭の中で繰り広げる戦争を見守ったことは、A児の母親との関係を活性化させ、「卵のパフォーマンス」を生み出していくことに連動していったものと思われる。

また、A児が、T1の膝にのったことは、母親を揺さぶり、母親の絵本の読み聞かせや、母親が「卵のパフォーマンス」を受け入れていくことに連動したものと思われる。その時期、A児は、幼稚園の行事に参加し、友だちと遊ぶようになっている。

プレイセラピーで起こったことは、すぐに母親面接に響き合い、それがプレイセラピーや母子関係を活性化させ、幼稚園の生活にも波及していく。

さらに、もし母子が心行くまでの卵のパフォーマンスを堪能できたとしたら、展開はさらに大きく変わるだろう。渡辺(2011)は、ここで父親の登場を強調している。母子並行面接で起きていることが、父親を揺さぶり、父

親が母子を支援することにつながることから、母子は安心感をもって、関係の構築を進めることができたのではないかという所見である。

最後に、こうした分析を通して、幼稚園や保育園で、不適応を起こす子どもたちの3歳までの育ちに、育ち直り、育て直しの課題を見出していく観点をもつことの重要性が指摘できよう。しかし、再接近期の子どもの両極に揺れ動く気持ちを受け止めて行くことは、母親にとっては、時にはいらだち、時には打ちのめされるような体験となる。母親自身の育ちの過程での未解決な問題が、子育てによって、賦活することを渡辺(2000)は指摘しているが、母親のそうした心情も含めて、母子並行面接を発展させていくことが今後も求められる。

(付記)

本事例は、2011年8月6日に乳幼児精神保健学会第14回学術集会岐阜大会プレ講演会において報告し、渡辺久子先生(慶應大学)に助言をいただいたものをもとに執筆したことを付記いたします。

参考文献

- 馬場禮子(2008)：精神分析的人格理論の基礎 岩崎学術出版社 pp.165～173.
- ジョン・ボウルビィ著(黒田実郎他訳)(1977)：母子関係の理論Ⅱ分離不安 岩崎学術出版社 pp.222～232.
- エリク・ホーンブルガー・エリクソン(仁科弥生訳)(1977)：幼児期と社会1 みすず書房
- エリク・ホーンブルガー・エリクソン(小此木啓吾訳編)(1973)：自我同一性 誠心書房
- マーガレット・マーラー他著(高橋雅士他訳)(1981)：乳幼児の心理的誕生 黎明書房 pp.50～140.
- 田中千穂子(1997)：乳幼児心理臨床の世界 山王出版 pp.43～79.
- 渡辺久子(2000)：母子臨床と世代間伝達 金剛出版 pp.49～55 pp.64～70. pp.224～235.
- 渡辺久子(2008)：子育て支援と世代間伝達 金剛出版 pp.77～88.
- 渡辺久子(2011)ぎふLD・ADHD学習会・子ども未来セミナー・FW乳幼児精神保健学会プレ集会講演記録集